文化・芸術資源の価値保全に配慮した観光活用の準備ための「観光まちづくりオーラルヒストリー」調査
-山口県長門湯本温泉に隣接する萩焼深川窯集落おける調査からの考察-

オーラルヒストリー　工芸　正会員　○石井萌美*　正会員　川原　晋 **
温泉地　地域資源　同　青木卓也*

１．研究背景と目的

観光の目的や形が多様化し、地域の歴史・文化・芸術や生活文化を生かした観光への期待が高まっている。このニーズに応えるには、観光事業者と住民や文化・芸術資源等の保有者が協力し、互いの将来像を重ねた観光地域づくりの将来像を共有する必要がある。しかし、取り組みが具体化するほど、観光の負の影響などへの懸念が先行して、関係者の理解や協力関係が進まない状況となることが多い [1)]。また、観光地として注目されると、行政の多様な部署が各施策で別々に地域に関わったり、外部事業者が参入するが、それまでの地域の取り組みへの理解が不十分なために課題が生じることも多い。

こうした課題を踏まえ、多様な主体が連携する観光地域づくりの初期段階の作業として、地域住民や資源保有者のこれまでの取り組みや想いを、連携する関係者とこれを共有していくことが重要となると考えられる。筆者らは、その方法として、ステイクホルダー個人個人への十分な聞き取り調査結果を一次データベースとして、個人の営みの積み重ねからなる観光地域の歴史をとりまとめ、さらに、観光戦略に資するように、資源の時空間整理や文脈整理を個人の語りに紐付いた形まとめる「観光まちづくりオーラルヒストリー」調査手法を提起し、試行している [2)]。前稿では、登山観光地における観光と環境保全に尽力してきた観光事業者と地域住民を対象に調査した結果を報告した[注1)]。

本稿では、この観光まちづくりオーラルヒストリー調査が、文化・芸術資源の価値や産地の環境保全に十分配慮しながら観光活用を行うことに対して、どのように活用できるかを、アクションリサーチにより考察する。具体的には、温泉街振興と「萩焼」窯元振興の連携を目指す地域における窯元作陶家への調査を通して、観光の負の影響への懸念にどのように配慮・対処した、調査、議論、成果物としたか、および、オーラルヒストリー調査が、どのような効果をもたらしたかを分析する。

２．研究対象地について

研究対象地は、山口県長門市に位置する「萩焼」深川窯集落である。16 世紀末に毛利藩の御用窯を起源とし、現在５つの窯元に８人の作陶家がいる（うち３人は当代の子である）。「一樂・二萩・三唐津」と言われるほど名高い茶陶としての価値を維持しつつ、次世代の後継者による伝統の革新に取り組むため、萩焼深川窯振興協議会（以下、深川窯協議会）を設立し文化庁の助成金[注2]を活用しつつ、①技術・技法に係るアーカイブ事業、②国内外における需要開拓事業、③新商品開発事業が進められている。本調査は、その一環として、作陶家８名を対象としたオーラルヒストリー調査と集落のフィールド調査を行ったものである。

なお、隣接する長門湯本温泉では、長門市が星野リゾートに委託した温泉街全体のマスタープラン「長門湯本温泉観光まちづくり計画（2016 年 8 月策定）」を基に、2020 年 3 月の星野リゾート「界」の開業に合わせて、外湯の建替え事業や景観整備、夜間照明整備、エリアマネジメント組織による「オソト天国」のコンセプトのもとの河川や道路の公共空間活用、等を、公民連携で、多分野の専門家チームの支援のもと取り組んでいる。文化体験コンテンツとしての萩焼との連携もマスタープランに記載されている。

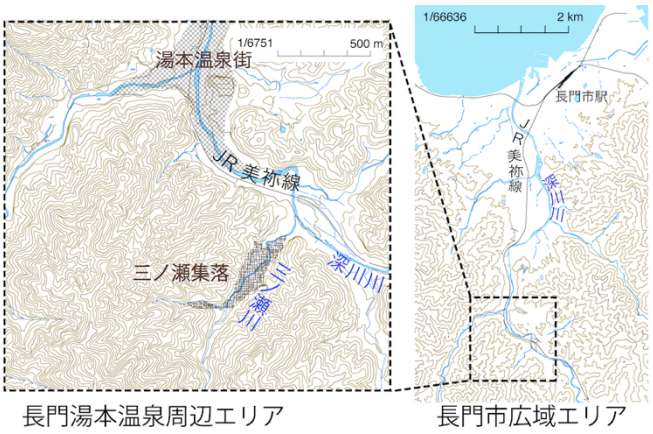


図1：対象地の地図

３．調査企画から成果資料の内容と調整過程

本節では、調査の企画段階から最終成果物を作成する編集段階までに、編集チームである筆者らと深川窯協議会がどのようなやり取りがされたかを振り返るため、議事録や提出資料と SNS によるやり取りの分析からわかった特徴を説明する。調査の流れを 3 つのフェーズに分けた（図２）。なお、今回の調査に入る前の２年間に、旅館の若手経営者と窯元の若手作陶家が共同経営する萩焼カフェの開業(2017 年)や、大学による旅館と萩焼窯元の関係を提案する学生ワークショップの実施(2017 年)他、日常的な意見交換の下地がある。そのため調査企画の初期から、温泉街との連携を念頭に入れつつも、窯元側の意向に寄り添った調査・成果物を目指した調査提案から始めた。

【調査企画フェーズ】

2019 年 5,6 月の深川窯協議会との打合せで、調査方法と成果資料のイメージを提案（図 1 中表）し、窯元側の意向を聞いた。ただ、成果資料の形は活用方法の議論に繋がり、各窯や作家、親世代、子世代それぞれで、PR したいこと、欲しい情報が、当然ではあるが異なり、観光地側の 5 窯全体を俯瞰する資料のイメージとはすぐには合意できないことがわかった。そこで、まずは活用方法を一部棚上げにし、大学として学術的に深川窯の歴史アーカイブを作成することで合意を得た。近年、深川萩に関する歴史資料の更新がされていないということが挙げられていたからである。また、オーラルヒストリー調査方式を提案し、そのなかで多様な成果物につなげられる情報の収集を行うこと、および文化的景観の価値把握など学術的興味から集落調査をさせてもらう形とした。オーラルヒストリー調査のインタビュー項目は、プレヒアリングと文献調査、文献には掲載されていない各作陶家の基礎情報を得るための事前アンケートをもとに作成した。

【調査実施フェーズ】

2019 年 9 月 25 日～28 日の 4 日間で、8 名の作陶家にインタビュー調査を行った。調査方法は、1 人 2,3 時間の半構造化方式のインタビューである。三ノ瀬集落での遊びや風景、行事・経歴・作風・窯の経営・窯の伝統に対する思い、萩焼の制作工程や各建物の用途などついて、適宜地図を活用したり、現地を案内してもらいながら聞き取りを行った。また、窯元集落らしい景観情報を収集する、集落フィールド調査を行なった。観光客の視点でのわかいりゃすい景観特徴も記述するために、初めて集落を来訪した 3 名の学生にも、三ノ瀬集落の写真の撮影を依頼し、写真の評価を自由記述で記録してもらった[注3)]。

【成果資料編集フェーズ】

成果物の編集、取りまとめにあたっては、調査企画フェーズで明らかになった各作陶家のブランド戦略等の多様性と観光活用時の負の影響に配慮して、次の 2 点でが重要であった。ひとつは、情報開示の段階を定め、それに合わせた資料内容としていくこと。観光地側期待したい一覧性が作家を比較する印象とならないようにすること、である。具体的には次のようにした。

●調査で得た全ての情報、成果物

聞き取り結果を全てを一次編集資料とした。それを元に年表形式や地図への落とし込みなど時空間整理を行い、二次編集資料を作成した。最終的に情報公開しないことにしたものは、個人へ返却と大学が保管とし、活用については個別相談とした。

●窯元集落 5 窯のみの共有資料

深川萩や集落のアーカイブ資料として、5 窯で共有する資料として「萩焼深川窯史」を作成した。この段階では、インタビューの語り手の校正を元に、作家や窯のプライベート面や経営面は要望に従い修正した。また年表は、当初は個人の心情の動きや出来事、個人間の比較にフォーカスして整理していたが、集落や深川萩全体について言及した話にのみフォーカスして整理し直した。作陶空間配置図は、作陶、資材置き場、来訪の場など窯元の特徴的な敷地空間について、当初は各部屋の実測と作業工程の導線の作図を試みたが、プライベートな内容であるため、建物用途の作図にまで簡略化した。

●旅館、まちづくりチーム（行政・専門家）共有資料

今後の観光振興と窯元振興の連携を目的とし、観光地側に共有する資料として「萩焼深川窯史 抜粋版」を作成した。この段階では、情報開示されると防犯上危険である情報や、作家のブランディグに関わるプライベート情報は削除し、インタビュー記録は写真のみとした。

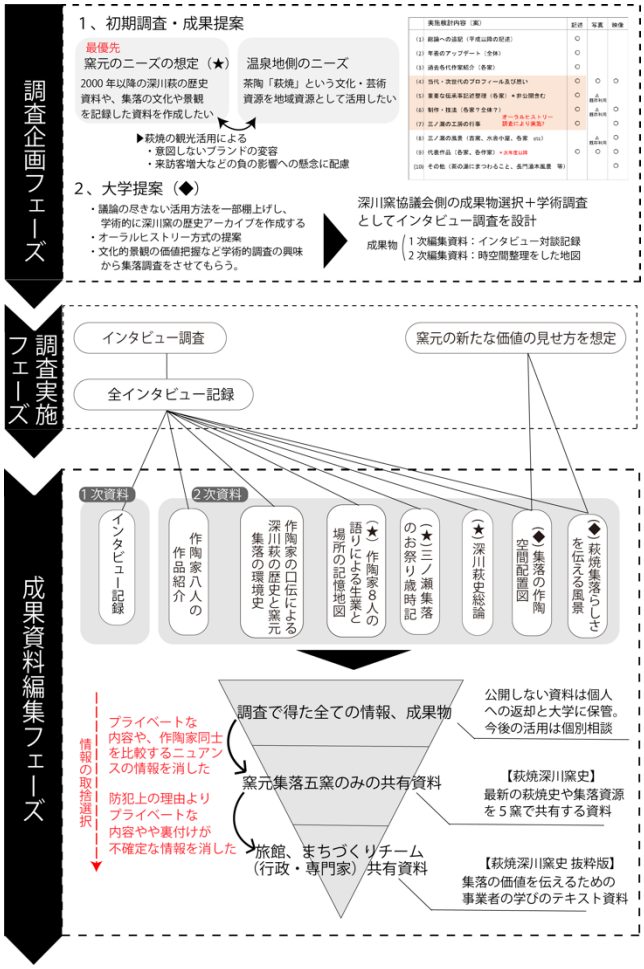
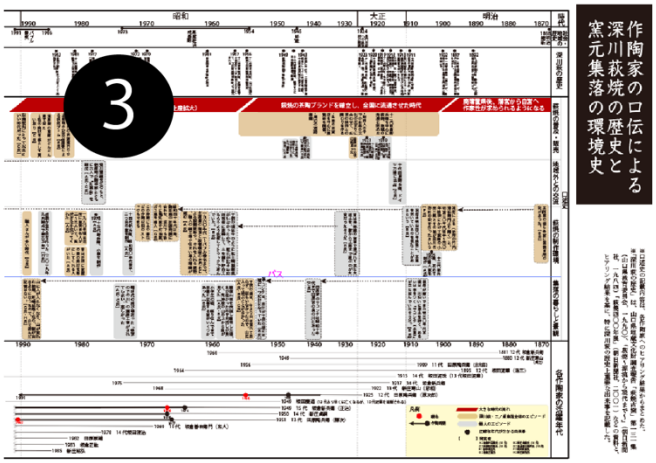


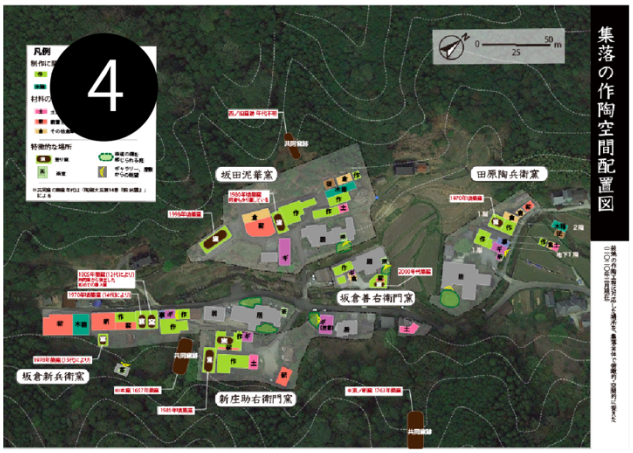
図2：3つの調査フェーズの概要

4．整理・編集方法、成果物

聞き取り調査の結果を元に、次のような成果物を作成した（図 3）。

❶オーラルヒストリー・インタビュー記録：聞き取り調査結果をテキスト化したものに、語り手による確認・修正・補足を加えた記事。語りの内容だけでなく、思考の流れやその場の状況等も含め詳細に記録している。各作陶家の経歴や、三ノ瀬集落や萩焼に対する思いや考え





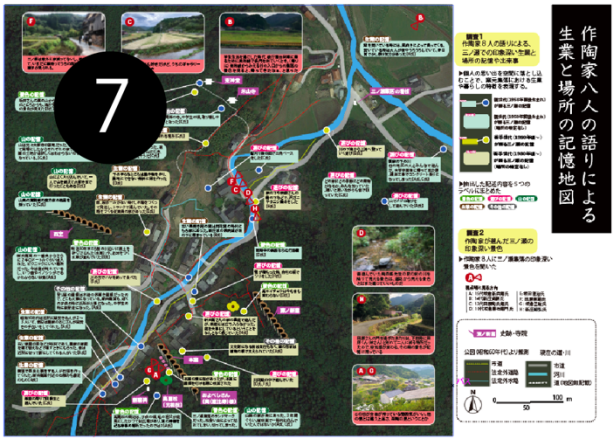


図３：観光まちづくりオーラルヒストリーの成果資料

方など、それぞれの個性が表現されている。これを一次データベースとして編集し、以下の 2〜7 の成果物を作成した。 抜粋版資料では、記事内容は削除し、調査風景の写真のみを掲載した（写真❶'）。

❷深川窯作陶家 8 人の代表作品：各作陶家から頂いた、作風の異なる３点の代表作品についての写真、作品名、技法などの解説をもとに、深川窯作陶家 8 人の代表作品が一覧になるように表現した。過去の経験やこだわり、独自に開発した技法を生かし、各々特徴的な作風が見られる。

❸作陶家の口伝による深川萩の歴史と窯元集落の環境史：口述を積み重ねることで見えてくる、萩焼深川窯と三ノ瀬集落の時代変化を表現した。既存の萩焼の公的年表の中から、深川萩に関する記載のみを抽出し、これをベースとした。さらに個人の語るエピソードを、「萩焼の普及・販売」「地域外との交流」「萩焼の制作環境」「集落の暮らしと景観」の 4 項目に分けて時系列に整理した。口述をベースとしていることを強調するために、発言者を明記した。

❹集落の作陶空間配置図：萩焼の作陶工程に対応した場所を、集落全体で俯瞰的・空間的に捉えることで、窯元集落の特徴や重要な場所、資源を表現することを試みた。結果、作陶、資材置き場、来訪の場など窯元の特徴的な敷地空間を捉えたほか、最盛期の名残などが空間や資材置き場の規模に表れていることがわかった。

❺三ノ瀬集落のお祭り歳時記：三ノ瀬集落には昔から伝わる４つの祭りがある。しかし文献として記録はないため、今の作陶家の皆さんが持つかつての祭りの記憶、および現在の祭りの様子を記録にとどめた。時代のニーズに合わせて規模や頻度は変わっているが、床の間に配置するもの、掛け軸、料理などが特徴的な各お祭りの神事は今でも丁寧に継承されていた。

❻生業と場所の記憶地図：作陶家の個人の幼少期の記憶や原風景、印象深い空間、大切にしたい空間や景色を集落地図にプロットすることで、窯元集落における生業や暮らしの特徴を表現することを試みた。幼少期から山や川に関する景色の記憶が総じて強く、似た原風景を持ち合わせていることがわかった。また、窯焚きや火事といった火の記憶も窯元集落の特徴だと考えられる。

❼萩焼窯元集落らしさを伝える風景：茶陶の窯元が集積する集落の美しさや文化的景観と捉えられる価値を記述し、初めての人でも訪れることで伝えられる深川萩の価値を表現することを試みた。作陶の場であることを伝える景色と、工芸を担う作陶家のもつ美意識や茶道の精神が反映されていると思われる、庭や生け垣の手入れの行き届いた景色や、石や木のサインが特徴として挙げられた。

５．編集・成果物の活用について

本調査結果は、「萩焼 深川窯史 〜萩焼深川窯オーラルヒストリー調査 及び資料作成委託〜」として冊子にまとめ、窯ごとに配布した。また、長門湯本温泉の旅館の経営陣に回覧してもらった。その結果、旅館の経営陣が深川萩に興味を持つ観光客への説明資料として利用していきたいという意向を示した。各旅館にも「抜粋版」を今後配布予定である。今回の成果資料の一部をパンフレットに掲載したり、湯本温泉の旅館の一角で紹介することで、長門湯本温泉の観光客に萩焼を購入してもらうという新たな販売戦略に資する資料として期待できる。

また、今回の取り組みを通して萩焼深川窯振興協議会が立ち上がり、その代表を若手の作陶家が担うことが決定した。成果資料が、旅館の宿泊客が深川萩に興味を持つきっかけとなるように、湯本温泉旅館側と協議会の踏み込んだ連携が期待される。

本調査は、文化・芸術資源を観光活用する際の負の影響への懸念に対し、窯元側にもメリットがある形で行った。そのため、調査の各フェーズで観光地側の意見だけでなく、窯元側の意向、ニーズを取り入れ、調査内容に反映した。さらに、成果物の情報公開の範囲に段階を設け、地域資源や萩焼ブランドの保全、個人情報の取り扱いを考慮し、段階ごとに情報の取捨選択を行った。また、今回の「観光まちづくりオーラルヒストリー調査」のプロセスと成果物を通して、深川萩を語る上で共通認識となる資料ができ、さらに観光地側と深川萩焼の作陶家側の連携が促す地域の窓口となる組織が設立されるといった成果があった。これらの資料や組織が、今後の観光地域づくりにどう活かされるか期待していきたい。

謝辞：本調査にあたっては、萩焼深川窯振興協議会の皆様、長門市役所成長戦略課、LEM 空間工房 長町志穂氏,写真家安森信氏と協働で行い、情報や写真の提供や助言を受けた。記して謝意を表します。

【脚 注】

注 1）前稿 [2)]では、東京都の高尾山麓エリアにおける観光事業者と地域住民を対象とした調査と成果を報告した。八王子市高尾山周辺地域都市整備計画の付録編として位置づけらている。

https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/006/001/002/p024983.html

注 2）平成３１年度伝統的工芸品産業支援補助金の支援を受けている

注３）調査手法について山下ら,2017[2)] を参考にした。

【参考文献】

1)川原晋（2017）「人口減少社会における観光まちづくりの可能性と進め方」，日本都市計画学会「都市計画 329 号」特集:人口減少社会を救う観光まちづくり

2)甲田亮輔,川原晋ら,(2019)「多主体連携による観光地のプランニング手法としての『観光まちづくりオーラルヒストリー』-東京都八王子市 高尾山地区での実践より-」 日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画), pp.53-56（選抜梗概）

3)山下三平,他 2017「陶芸の里・小石原皿山の景観表象の把捉と評価-実存的景観論の試み-」土木学会論文集 D1(景観・デザイン), Vol. 73, No. 1, 1-20, 2017.

*東京都立大学 都市環境科学研究科 観光科学域 博士前期課程

**東京都立大学 都市環境科学研究科 観光科学域 教授

*Master's Programs,Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.

** Prof, Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.